Ⅰ　火災の予防と対応

放火を除けばほとんどの火災は、ストーブやたばこ、たき火などの不注意から起こる人災です。大切な命や財産を失わないように、火に対して油断しないで、防火意識を持って慎重に行動しましょう。

１　火災を防ぐ８つのポイント

コンロ　揚げもののときは、その場を離れない

- コンロのまわりに燃えやすいものを置かない。
- コンロから離れるときは必ず火を消す。（食用油は３５０度程度になると自然発火する。）

たばこ　寝たばこや投げ捨ては厳禁

- 決められた場所以外でたばこを吸わない。
- 火のついたたばこを残したまま、その場を離れない。
- 灰皿は大きめのものを用意し、常に水を入れておく。

たき火　風の強いときにたき火をしない

- 周囲から燃えやすいものや危険物をかたづける。
- その場から絶対に離れない。
- そばに水を入れたバケツを用意し、終わったら必ず火が消えたことを確かめる。

放　火　家の周囲に燃えやすいものを置かない

- ゴミは収集日の朝、指定された場所に出す。
- 車庫・物置などの戸締まりをする。

火遊び　マッチやライターを子どもに持たせない

- 子どもの手が届くところにマッチやライターを置かない。
- 日ごろから子どもに火の怖さや正しいマッチの使い方を教える。
- 花火をするときは必ず大人が付き添う。

配　線　たこ足配線をやめ、正しく使う

- 傷んだコードはすぐに修理・交換する。
- 電気器具は取扱説明書などをよく読み、正しく使う。
- 使用後は電気器具のプラグを抜いておく。

ストーブ　燃えやすいものを近づけない

- カーテンの近くにストーブを置かない。
- ストーブで洗濯物を乾かさない。
- 給油は完全に火が消えたことを確認してから行う。
- 対震自動消火装置付きのストーブを使う。

火元確認　就寝前・外出前には必ず火元確認

- 火元の安全を確認するときは、１か所ずつ指さしながら、「ガスの元栓よし」「ストーブ、よし」などと声を出し点検を。
- 点検すべき項目を書いたメモを壁に張り出し、それを見ながら確認するのも効果的。

住宅用火災警報器はもう設置しましたか？

消防法の改正により、新築・改築の場合は平成１８年６月１日から、すでに住んでいる住宅でも平成２０年６月１日から、住宅用火災警報器の設置が義務づけられました。浴室、トイレ、洗面所、納戸などを除くすべての部屋・階段へ設置し、火災の早期発見に努めましょう。

熱感知式
台所など火災以外の煙が発生しやすい場所に向いています。

煙感知式
居室や階段への設置に向いています。

くわしくは消防局予防課（TEL:202-1613）へ。
ホームページ　http://www.city.chiba.jp/shobo/yobo/yobo/index.html

2 火災発生・どうする？

　初期消火の段階を超えてしまうと、自分たちだけで火災を抑え込もうと考えるのは危険です。無理をすると二次災害につながりかねません。
「決して無理をしない」ことが鉄則です。

① 早く知らせる

「火事だ」と大声を出し、隣近所に援助を求めましょう。
　声が出なければ、やかんなどを叩き異変を知らせましょう。

② 119番通報は正確・簡潔に

119番に通報するときは次のようなことを正確に伝えましょう。

① まず火災であることを伝える。
② 場所(住所)はどこか。
③ 建物の種類は。木造かビルか。
④ 脱出できないでいる人の有無やけが人は。
⑤ 火災現場付近で目印になるものは。

③ 天井に火が燃え移るまでが限度

　一般的には、出火から３分以内に天井に火が燃え移り、初期消火のレベルを超えてしまいます。自分たちで消火するならば、出火から１～２分が限度です。

水のかけかた

　ふすまや障子、カーテンなどの立ち上がり面にかけるときは、上から半円を描くようにする。

ストーブや畳などへは一気にかける。
　ただし油なべや感電の恐れがあるものには直接水をかけないで、他の方法で消火を。

④ 天井に火が燃え移ったらすぐに避難を

　出火から一棟火災になるまで約10分と言われています。
　天井に火が燃え移ったら、あっという間に火は燃え広がってしまいます。天井に火が移ったら無理をせず、すぐに避難しましょう。

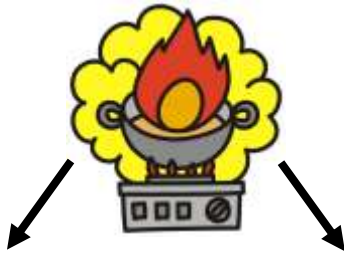
⑤ 消防隊の指示に従う

　消防隊の到着後は、消防隊に必要な情報を伝え、消防隊の指示に従います。自主防災組織は消防活動がスムーズに行われるようやじ馬の整理などにあたりましょう。
　また、周辺住民の避難が必要なときには、消防隊の指示に従って自主防災組織で避難誘導活動に協力しましょう。

3 火元別・消火のポイント

油なべ

水をかけるのは厳禁。消火器で消し、ガスの元栓を締めるのが一番。下図のように、なべにふたをしたり、ぬらしたシーツやタオルでなべ全体をおおう方法もあります。

火が消えても完全に温度が下がるまでは、ふたやシーツをとらないようにしましょう。

消火器があるとき

● なべに向かって噴射し、火が消えたらガス栓を締める。

消火器がないとき

● なべに合うふたを手前から向こう側にかぶせガス栓を締める。

● ぬらしたシーツを固く絞りなべ全体をおおい、シーツの上からガス栓を締める。

カーテン ふすま 障子

火が燃え上がるときの通り道となるので、天井まで燃え広がる前に水や消火器で消火を。間に合わなければカーテンはレールから引きちぎり、ふすまや障子はけり倒して消します。

石油ストーブ

消火器があれば火元に向けて噴射を。ない場合は、毛布などをストーブにかぶせ、バケツの水を真上から一気にかけます。火が消えた後も、天板の余熱で再発火するケースがあるので注意を。

衣類

着衣に火がついたら、転げ回って火を消します。風呂場の近くにいるときは、浴槽の残り水を頭からかぶるか、浴槽の中に飛び込みましょう。

髪の毛に火がついたら、化繊以外の衣類やタオルなどを頭からかぶります。

電気製品

いきなり水をかけると感電する危険も。まずはコードをコンセントから抜くこと。できればブレーカーも切ってから火を消しましょう。

たばこ

たばこ火災で怖いのは炎が出ない無炎燃焼。着火後、数時間たって燃え出すこともあります。見えないところに火ダネが残ることもあるので、広範囲に消火器や水をかけましょう。

風呂場

いきなり戸を開けると、火勢が強まる危険があります。消火器や水を用意して、ガスの元栓を締め、徐々に戸を開けて一気に消火しましょう。

4　滞在場所別・避難のポイント

木造住宅

●２階にいて階段が使えないとき

ロープや縄ばしごを使って避難を。ない場合はシーツやカーテンをつないで代用したり、雨どいを伝って逃げます。

●やむをえず２階から飛び降りるとき

ふとんやマットレスなどクッションになるものを投げ落としてから。

ビ　ル

●まず出火場所の確認

上の階が火元であれば、迷わず階段を使って下へ逃げます。下の階から出火した場合は、非常口を出て外階段を利用して下へ。もし下へ逃げられないときは、屋上に逃げて風上側で救助を待ちましょう。

●自室から出火した場合

他へ類焼しないように窓やドアを閉めてから避難してください。

地下街

●落ち着いて行動を

パニックに巻き込まれないように冷静に行動し、係員の誘導があるときはその指示に従いましょう。

●煙や有毒ガスを吸い込まないために

口をハンカチやネクタイなどでおおい、姿勢を低くして、壁を伝いながら地上に脱出します。避難口は60mごとにあるので、あわてないこと。停電時は明かりの見える方向が地上への出口です。

映画館・劇場

●座席が出入口に近い場合

迷わず近くの出入口（非常口）から急いで脱出しましょう。

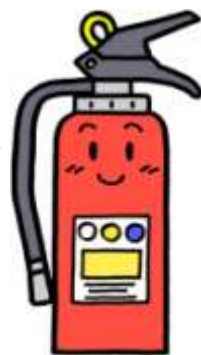
●座席が出入口から遠い場合

観客の多くは出入口に殺到するはずですから、むしろ人の波を避けて係員の誘導に従うほうが安全。観客の知らない避難ルート（従業員用通路など）を教えてくれることもあります。

5 消火器と消火について

◆消火器の基礎知識

白　普通火災用
黄　油火災用
青　電気火災用

●安全ピンのはずし方はメーカーにかかわらず共通です。
　はずし方の確認をしておきましょう。
●火災の種類によってラベルが異なります。
　どの火災に適した消火器か確認しておきましょう。
●使い方を読むだけでなく、防災訓練などに参加し、
　実際に動作してみることが肝心です。
●高温多湿を避けて設置します。さびついたり変形したりしているものは専門業者に点検を依頼しましょう。また、一度安全ピンを抜いた場合（噴射していない場合）も同様です。
●消火剤の交換時期は5～8年と言われていますが、最近販売されている消火器には交換時期を表示しているものもありますので、確認してください。

◆消火器を使った消火方法

消火器の使い方

① 安全ピンを抜く

② ホースをはずして
　火元に向ける

③ レバーを強く握って
　噴射する

消火のコツ

① 自らの安全を考え、逃げ口を背にして消火にあたる
② 立ち上がる炎や煙に惑わされず、
　　火元を見極め、火元を消すように噴射する
③ 消火器ではいったん火が消えても、再び燃え出すこと
　　もあるので、念のため水をかけて完全に消しておく

※消火器の場所を確認しておこう
　火災の際に、消火器がどこにあるのか分からないようでは困ります。
　どこに設置してあるのか、普段から確認しておきましょう。

◆消火器以外での初期消火の方法

バケツリレーによる消火訓練

火災が起きた際に、必ずしも消火器が近くにあるとは限りません。

防災訓練では、近隣で協力しあって消火活動を行うバケツリレーも試してみましょう。バケツの水でどれだけの消火効果があるのか、身をもって体験することができます。

※バケツ以外のものも試してみよう
　実際の火災では、バケツリレーをするだけのバケツがすぐに集まるかどうかわかりません。
　そこでバケツの代わりに、洗面器やゴミ箱、鍋などの食器、スーパーの袋など、身の回りにあるものでどんなものが消火活動に使えるか、さまざまなものを試してみるのもよいでしょう。